

5 思惑と偶然

クレオパトラの鼻の格好がどうであったかということは、本来大した問題であるはずがない。ところが彼女の鼻の先が曲っていたことが、当時の世界史の方向を変える機縁になったといわれている。

ユーモアというものは、微妙なタッチをもつ人生の塩ともいべきものである。ある軽妙なユーモアのためにその場面の雰囲気が一変して、難航していた懸案がケロリと片づくことがある。チエンバレンがある日登院してみると、自分の前を鷺鳥のような格好で歩いていくチャーチルを見かけた。彼は早速その真似をしながらおどるように歩いてみた。ところが彼の物真似をその後ろでみていたマックケネイルは、腹を抱えて笑っていた。その一事でチエンバレンとマックケネイルの二人の間に永年わだかまっていた、動きのとれない氷の海のような不和が解けたという話がある。

これらはみんな、たわいもない些事であるが、それが案外に重大な契機になるものであることを物語っている。政界の出来事も、いわゆる評論家の書いた青写真のように必ずしも運ぶものではないし、策謀家の思惑のように動くものでもない。そのときの機縁というものが、すべての人

の思惑、いな当事者の目論見とは別に、事がらの帰結を招来する契機になることが少なくない。去る六月に行なわれた岸内閣の改造にも、このような消息がよみとれるように思われる。私はここで、自分がたまたま居あわせた池田さんの入閣に至る経緯の二こまを想い出す。

去る六月十六日の夜のことであった。例によって火曜会（池田さんと松永安左工門老を囲む会）の六月例会が開かれていた。少し遅れて池田さんと私も出席した。出席してみると、いつもの座敷で日銀の山際さんと關銀の太田さんがつくねんと坐っているだけであった。他の面々は隣りの部屋で、難航した内閣改造をめくって喧々ガクガクの論議を交している最中であった。そして私にまずその別室に来てくれということであった。入ってみると、皆の視線が私に注がれ、いつになく真剣な面持ちの松永老が、半ば紅潮した興奮を交えてこういわれるのである。

「もしこの改造で岸君が失敗したら、政局はあらぬ方向へ走ってしまうおそれがある。岸君の槍口をあげづらい、岸君を槍玉にあげることもいいが、日本の国民や保守党をどうしようとするのか。やれ筋がどうのこうの、イキサツがどうのこうのと、君たちのやっていることはなっております。こういう局面になってきたら、イキサツや筋に拘泥すべきではない。勇気をもって政局の収拾に乗り出さなければ、池田君も政治家の風上におけないではないか。君がそばについて、いったい何をしているんだ。」

慈父のようにやさしいいつもの老人と違って、松永老は激越な口調で曇みこんで来た。私はまるで被告扱いである。そこで私は、

「こんどの改造は私どもが進言したのではなく、岸総理が総理としての発意と責任においてやっておられることです。池田に対する入閣懇請も、こちらから申入れたものではなく総理の希望であり懇請です。だからまず断わっておきますが、池田は全く受身であって進むも退くも全く自由な立場におるといふことです。いまのお言葉は私として、簡単に聞き流すことができないものがあります。総理の発意と責任において手を染められた改造が、いろいろの曲折を経て今日全行詰ってしまい、仰せのように政局が大きい不安に陥入ってしまった。この政局不安を解消するのは池田はじめ、われわれの責任であつて、そうしないのは勇気がないばかりか、政治家でもないといういい方をされるのは、岸さんに対して貴方がたは点数が甘く、池田に対しては辛すぎはしないでしようか。なるほど仰せの通り岸さんも過誤なきを保し難い人でしょうが、池田だつて黙つて人の不始末の尻ぬぐいをするほど偉い男ではありませんよ」といった。

私もムカムカしていたものだから、ついこの人たちに食つてかかつてしまったのだが、松永老は「少々言葉が過ぎたかね」と多少柔らかい面持ちになられた。その後、池田さんも入つて来て、その人たちからしきりと政局收拾のための入閣を勧告されたが、池田さんは極めて不機嫌な面持

ちで頑固に内閣を拒み続けていた。そこで今夜はみんなで、もっと考えようということでのその会は閉会となった。

私はこの改造問題がおこって以来、毎夜、寝不足がつづいていたが、その夜は朝方までまんじりともできなかった。私は乏しい頭で政局の前途にあるいくつかの可能性をあれやこれやと分析して、その得失を考えていた。池田、河野両氏の内閣しない小粒内閣、河野、大野両氏の巻き返しによる河野、大野寄りの内閣、岸さんの投げ出し等々、いろいろの場合を自分なりに分析して、そのいずれも、この際とるべき方策であつてはならぬという考えに傾きかけていた。

そこで翌朝未明、私は床の中にいた池田氏に電話をかけて、「どうも今日という日は、えらい日になりそうな気がしてなりません。岸さんの従来からのヤリ口をあげつらったり、この一月に岸内閣へ離縁状をたたきつけた経緯にこだわっているのも、昨日まではやむを得なかったと思いますが、今日われわれが直面する段階は、昨日と次元を異にした局面になりそうです。今日は大勢の人から貴方の進退について、いろいろ進言や献策があると思います。貴方は反主流の頭目という立場ではなく、日本の政界における領袖としての立場に立って、素直にその意見をお聞き願いたい。そしてみずからの意見（内閣を拒むこと）はなるべく述べられずに、考えておくということにして下さい」と希望し、池田さんも「うん」と応えられた。

その日は私の予感したように、政局は最悪の局面を迎えた。午前の寄りつきから株式市場には「投売りが多く殺到して、ダウは三十円方の暴落をみた。岸総理側近筋から「岸さんが退陣の意向をもらされた」というような情報さえが伝えられた。午後二時半になって岸さんと河野さんとの間の糸は断たれた。岸内閣は最悪の事態に直面し、政局不安は刻一刻、深刻の度を加えてきた。私が池田さんを訪ねたのは午後三時ちょっと前であった。私は書齋で今朝からの経過、すなわち吉田元総理その他要人の意見や、岸総理、佐藤蔵相その他現役要人からの懇請、言論界のベテランの進言その他を聞かされた。

私は「人の世のめぐり合わせというものは、われわれの知恵や分別を越えたものがありますね。今までわれわれがとってきた立場は、われわれなりに間違っていたとは思いません。しかし今日この政局に直面し、みずから求めたものでもないのに、貴方は文字通り内閣改造の中心人物になつてしまいました。岸さんは貴方にとって民主党結成と鳩山内閣の誕生、吉田内閣の退陣という一連の経緯からみて終始、政敵だった。それなのに、その岸さんの立場を救い政局の混迷を打開する力ギは今や貴方が持つておられます。しかしいつも貴方は、われわれは政治家として政界というコップの中で物を見てはいけけない、国民の前で舞いをまうべきだといつておられます。このことを今、私は思い出しています。この段階にきては唯一つ、現前の混迷した政局を軌道に乗せ、

国民に安心してもらうのが貴方のとるべき態度ではないでしょうか。進むのが是か、退くのが是か、正直にいつて私にもわかりません。進むとなれば、貴方に対し反主流の諸君は冷淡になりましょうし、主流の諸君からは警戒されることになり、自派の諸君も必ずしも釈然としないことでしょう。いわば貴方はいちおう孤立することになりましょう。退くとなった場合、貴方はまた国民一般から頑固一徹でいつてもわがままに振舞い、政治の全局を收拾する弾力的能力がないというそしりを免れないでしょう。進退谷まるとはこのことでしょうか、道は一つしかありません、二つの道はないはずです。しかもいま、その決断を貴方は求められています。私は貴方に勇断を求めます。困難ないばらの道ではあるが、政局收拾のため去就をきめて下さい。毀誉褒貶は論者と史家に譲り、政界の領袖としての自覚と責任において総理と隔意のない懇談を遂げ、総理の真意をよくたたかかれた上で入閣に踏み切ってください」と懇請したのであった。田中角栄君が飛びこんできて、機関銃のような速射法で入閣を説き、嫌がる池田夫人にモーニングの用意を勧めたのも、このときのことであった。

その後の経過は世間周知の通りである。かくて池田さんは半ば国民の期待に沿って、半ば国民の冷評のうちに入閣した。進むが是であったか、退くが是であったか、いまなお私には判定しがたい。私はあるとき池田さんのおかれたギリギリの限界状況にあつて、ああするより他に道がな

かつたのだと自分にいい聞かせている。

吉田さんが六年にわたる永い政権の座を去つたのは、昭和二十九年二月七日であつた。それから四年半、日本の政界は旧民主党系、換言すれば反吉田的勢力の支配下にあつたのである。従つて吉田さんの直系池田さんには、いわば不遇の時代がつづいて、日ソ交渉や保守合同、その他政界の重大事件には終始、反主流の立場で苦悶してきた。ところが今度の改造の結果、内閣のキャップこそは変わらないが、これを支える柱は池田さんと佐藤さんになつたといえる。その池田、佐藤両氏はまぎれもなく吉田さんの高弟で旧自由党系の実力者である。このような結果は、もちろん私どもの仕組んだ芝居ではない。また当の池田さんや佐藤さんが目論んだ構図でもない。ただ六月のあの時期における事の偶然的成行きが、すべての人の思惑を越えてもたらした結果である。政界の出来事はこうした偶然的成行きによることが少なくないといえよう。